

紀要

■設立50周年記念号

- 鳥浜貝塚におけるニホンジカの利用…………… 佐藤 巧庸 (1)
- 土偶の意味論に関する理論的基盤の整理と試論…………… 瀬口 眞司 (13)
- 湖北・湖東地域の前期古墳の葺石…………… 宮村 誠二 (23)
- 横穴式石室の空間設計の検討
—志賀古墳群における平面プランと副葬土器…………… 堀 真人 (28)
- 木村石塚古墳出土埴輪について…………… 辻川 哲朗 (40)
- 近江八幡市大中の湖南遺跡の再検討
—石敷き遺構 第1遺構の構造について— …………… 田中 咲子 (57)
- 小型海獣葡萄鏡について…………… 福井 知樹 (61)
- 墨書土器にみる古代の近江 —その2—…………… 濱 修 (64)
- 比良山系の山寺に築かれた石垣と回峰ネットワーク… 小林 裕季 (79)
- 『阿刀氏家譜系脈 御由緒二関ハル古記調査書類』
現代語訳・解題(2)…………… 阿刀 弘史 (90)
- 将棋史研究ノート 11—改めて将棋について考える—…………… 三宅 弘 (98)
- 「清瀧寺徳源院」絵図の示すもの…………… 中川 治美 (107)
- マメ類の利用についての研究ノート(2)…………… 小竹 志織 (119)
- 木製品の保存処理について —課題と実際—…………… 中村 智孝 (122)

34

土偶の意味論に関する理論的基盤の整理と試論

瀬口 眞 司

1. はじめに

土偶の意味—根本的性格や用途・製作意図など—に関する研究の歴史は130年に及ぶ。この間、多くの研究者がそこに立ちはだかる限界—認識の更新や深化に必要な端緒の不在—に苦められてきた。結果として、この研究は長きにわたって停滞してきたようにも見える。レヴィ＝ストロースの構造主義的アプローチを参考にすると、その端緒を見出せる可能性がある。本稿ではその可能性について改めて論じてみる。

2. 土偶の意味論に関する研究の流れと現状

(1) 黎明期から提示されてきた仮説

A. その特色 現状の問題点を浮き彫りにするため、土偶の意味に関する研究（以下、土偶の意味論とする）の流れについて、まず整理しておきたい。この点は一度まとめたことがあるので（瀬口 2011）、詳細はそれに譲ることとし、ここでは要点に絞って簡潔に述べることにしたい。

土偶の意味論は、日本考古学の黎明から間もない明治19年（1886年）に始まる⁽¹⁾。以降、130年以上にわたり、様々な研究と議論が重ねられてきた。その中で提示されてきた主要な仮説としては①～③のようなものがある。

仮説①は、安産や生・再生に関わる女神像説である。起源は1910年に遡る。乳房や膨らんだ腹部を持つ土偶が目立つことから、大野雲外が提示した（大野 1910）。1922年には、この説に付加する形で鳥居龍蔵が地母神像説を提示した（鳥居 1922）。これは当時のヨーロッパで熱気を帯びていた地母神信仰に関する研究の影響を受けたものである。以降、これらの認識は様々な形に派生・展開しながら多くの研究者に継承されてきている。

仮説②は、依代・精霊像説である。起源は1926年にある。提起したのは谷川盤雄で（谷川 1926）、これもヨーロッパの学界で議論されていたアニミズム論の影響を受けながら提唱されたものだった。継承する流れはしばらくなかったが、20世紀末頃から再び支持する研究者が増えている。

仮説③は、身代わり像説である。この起源も日本考古学の黎明期に遡る。土偶の多くは破損した状態で出土している。これを「故意破損」によるものと見なし（坪井 1895）、病氣・怪我の治癒を祈るために破損する身代わり像だとする説である（八幡 1959 ほか）。

B. 上記仮説の問題点 上記のうち、仮説③の重要な要素として「故意破損」説がある。土偶のほとんどは破損して出土する。この状況を、呪術・信仰に関連した意図的な破損の結果だとみなす考え方だ。この説に対しては賛否

が大きく分かれ、20世紀の後葉から21世紀の初めにかけて、支持する立場と批判的な立場とで激しい応酬が交わされた。しかし、議論は平行線をたどったまま潜在化してしまったため、この考え方に対する位置付けは有耶無耶で曖昧になっているようにも見える。結果、少なくとも仮説③の影響力は低下した。

一方、仮説①・②から派生した認識は多くの研究者に浸透している。ただし、仮説②は資料による裏付けが弱い。何をもって根拠とするか、明示できる研究者は少ないだろう。そういった意味でこの仮説もまた有耶無耶で曖昧だ。

仮説①は最も多くの研究者が支持している説だ。確かに、乳房や尻、妊娠の表現が強調された土偶は少なくないため、土偶＝生や再生、生産を司る女神像としても間違いはないように思える。

しかし、実はこの仮説に関しても議論の余地は大きい。しばしば看過されがちだが、乳房や尻、妊娠の表現がない土偶もまた少なからず存在している（山田 1999）。資料に即して冷静に観察し、先入観に縛られることなく、中立的に捉え直すべきだとする意見も根強くあるし（松室 2013 ほか）、そもそも性を超越したものである可能性も指摘されている（佐原・小林 2001）。

また、少し視野を広げるだけで、その造形意図に悩まされる土偶は多数見出せる（瀬口 2020）。例えば、わざわざプレート状の顔面（≒仮面）を取りつけた土偶がある（図1-(3)・(4)）。その反面、頭部や顔面の表現が曖昧な土偶も存在する（図1-(5)～(12)）。あるいは女性像とは程遠い、厳めしい体格・容貌をもつ土偶も存在する（図1-(1)・(2)）。仮説①だけでは理解できない、多様かつ複雑で混沌とした世界が広がっていることを、これらの資料は教えてくれているようにも見える。

(2) 八幡一郎の提言とそのアプローチ

A. その特色 黎明期から提示されてきた上記の仮説群に共通する特徴は、経験則や民俗・民族例に基づくアプローチによるものだというところにある。

1939年、このような方針・方法を一変させようとする動きが提言された。提言したのは八幡一郎である。八幡は「日本先史人の信仰の問題」（八幡 1939）の中で、無形の精神活動を先史学が探ることの困難さを述べた。そして、従来の民俗・民族例に基づくアプローチを批判し、従来の土偶研究法の限界と研究の停滞を指摘した上で、2つの新機軸を提言している。その第1は型式学的・編年学的資料操作であり、第2は遺構からの出土状況を重視する姿勢である。

このうち、第1の新機軸として八幡が提言したことは、「先づ土偶の型式を調査し、型式の歴史的序列と地理的分布を吟味」し、そうすることによって「土偶の変遷並びに文化圏との関係を極め」ることである。結果、文化圏内の「他の文化要素との関係によって、該型土偶を生んだ社会的背景を知ること」が可能となり、「さすれば土偶本来の姿を求めることが出来、それによって真の意義の把握が可能になろう」と見通しを述べた。

その後も八幡は同様な見解を述べている（八幡 1959）。またこれを支持する多くの研究者により、繰り返し再提言がなされ、膨大な数の具体的で優れた実践もなされてきた（高柳 1987、鈴木 1989、小野 1984 ほか）。

以上のような八幡の提言の要点とは、経験則や民俗・民族資料に基づく類推ではなく、編年と分布、出土状況などを明確にし、考古学的手法を駆使してアプローチしていくところにつく。その結果、系譜や系統、時期的変化や地域的差異に関する所見や、それらを起点とした多くの優れた成果が蓄積されてきた。私たちの認識の構築には、資料に基づく事実の基盤が不可欠だが、広い視野で具体的かつ詳細な基盤を作り上げてきたという意味で、八幡の提言は有効で意義あるアプローチを生み出したと言える。

B. 八幡のアプローチの問題点 以上のような八幡の提言に基づくアプローチにより、土偶研究は大きな進展を見せた。その成果は世界に誇るべき量と質を有している。しかし、そのアプローチにも問題点はある。それは、土偶の意味論への本格的かつ具体的な展開ができていない点だ。

最初の提言から 80 年経った今、確かに八幡が思い描いていたように型式の歴史的序列と地理的分布はかなり明確になった。しかし、そのような努力と成果を起点にして、「土偶を生んだ社会的背景」や「本来の姿」、「真の意義」を見出す研究へと本格的に展開した例はまだ見出せていないように見える。もしかすると、膨大な数の土偶と、その多様かつ混沌とした様相を目の前にして、我々は折角手にしている重厚な成果——型式の歴史的序列と地理的分布に関する知見——を活かす理論的な基盤を未だ手にしていないのかも知れない。困り切った私たちは、認識の更新や深化への道を探るよりも、提示されてきたいくつかの有力仮説一皮肉なことに、それらの仮説の原形はいずれも 1939 年よりも遡る一をバランスよく受け入れることを選択し、有耶無耶なままの問題や、まとまっていない論拠、議論の余地などは取りあえず横に置きつつ、先学の所見をアレンジしながら柔らかに継承しようとしているようにも見える。

その結果として生まれているのが現状だ。土偶の意味に関する議論はこの数十年で大きく減少し、蓄積が進むことなく停滞が続いている。この状況をもし打開する必要があるならば、折角手にしている重厚な成果を活かすための発想の追加や観点の転換に関する新たな可能性を模索し、現状の限界を乗り越え、次のステージへ展開させるための端

緒を見つけることが最優先課題になるだろう。そのための方策はきっといくつもあるように思える。本稿では試みとして文化人類学の世界でレヴィ＝ストロースが採用したアプローチを参照し、認識の更新と深化に必要な理論的基盤の整理とそれに基づく試論を展開してみたい。

3. 可能性の模索—レヴィ＝ストロースの声に耳を傾ける

(1) レヴィ＝ストロースとは

世界の思想史に燦然と輝く名を遺すレヴィ＝ストロース（1908-2009 年）は、フランスの人類学者である。哲学の教授資格を取得したが、やがて哲学に幻滅し、1935 年、サンパウロ大学の社会学講師就任への誘いを受けてブラジルに渡った。数度の民族学的調査旅行において、無文字社会にあるボロロ族やナンビワラ族等と出逢い、その後の研究の土壌を育んだ。フランスに帰国後、ナチスによるユダヤ人迫害を避けてニューヨークに逃れた。そこでプラハ学派言語学者のロマーン・ヤーコブソン（1896-1982 年）と出逢い、彼とのやり取りのなかで構造言語学の原理、手法、基本概念を学び、後に自ら構造人類学と呼ぶことになる研究の理論的基盤を構築した。以後、1949 年『親族の基本構造』、1958 年『構造人類学』、1962 年『野性の思考』、1962 年『今日のトーテミズム』、1964～1971 年『神話論理』などを著し、無文字社会における親族体系と婚姻制度、トーテミズム、神話などの意味を次々に読み解いた。

氏が扱ったテーマはいずれも、多様かつ混沌とした様相を呈しているために多くの人類学者が手を焼いていたものである。そして、氏の仕事の特徴は、構造主義的アプローチによって、これらの難問を鮮やかに解き明かしていったところにある。一方で、土偶の意味論もまた、多様かつ混沌とした様相を呈しているために、多くの考古学者が手を焼いてきた。従って、氏が採用した構造主義的アプローチから私たちが学びとれることは今なお多いように思われる。

(2) 構造主義的アプローチとは

A. 本稿におけるテキスト では、構造主義的アプローチとは何か。レヴィ＝ストロースの膨大な研究の中から、その問いに対する解答を適正に読みとることは困難だ。しかし幸いなことに、氏自身が明瞭な解説をした例がある。1 つは、1977 年 12 月にカナダの CBC ラジオで行った連続講話を活字化した『神話と意味』である（レヴィ＝ストロース 1978（大橋訳 1996））。特にその第 1 講「神話と科学の出会い」では、リスナーから提示された「構造主義とは何か、私たちは混沌の中から意味を見出せていけるのか、どうしたら見出せるのか」という問いに対し、分かりやすい解答が示されている。

また、同じ 1977 年 10～11 月には日本でも講演会が行われており、その記録集である『構造・神話・労働』掲載の「構造主義再考」でも比較的分かりやすい解説がなされて

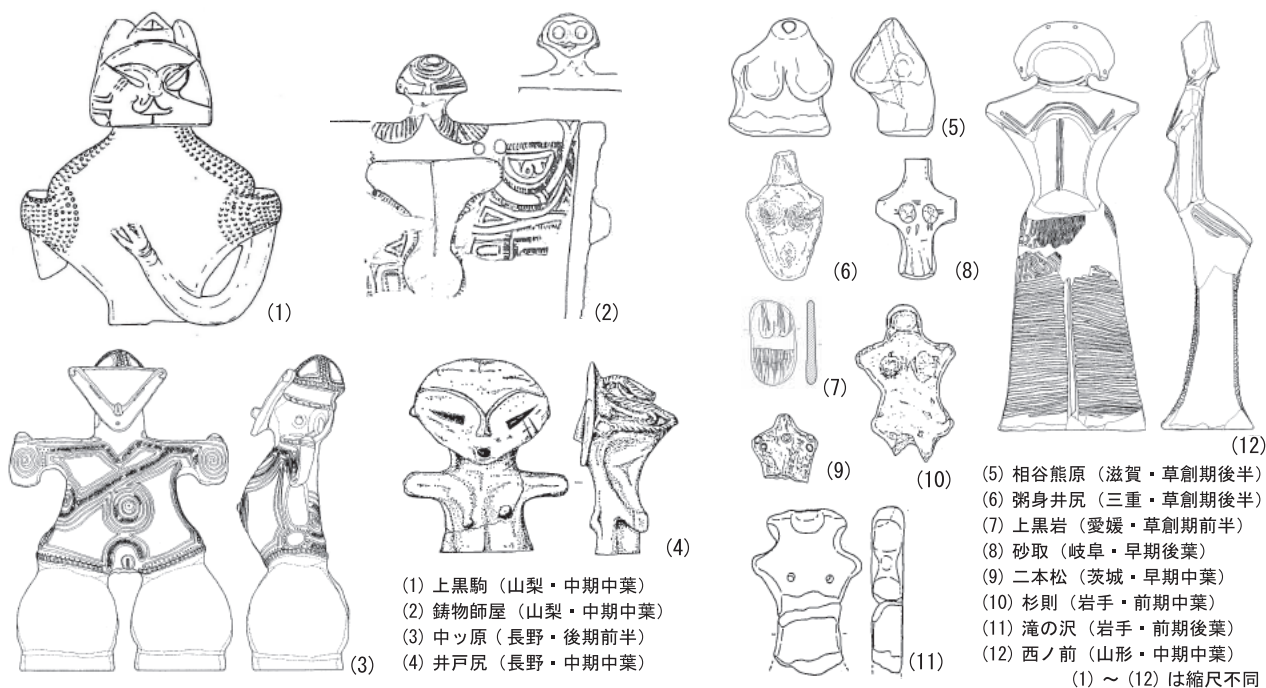
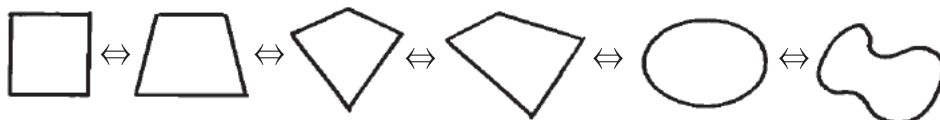


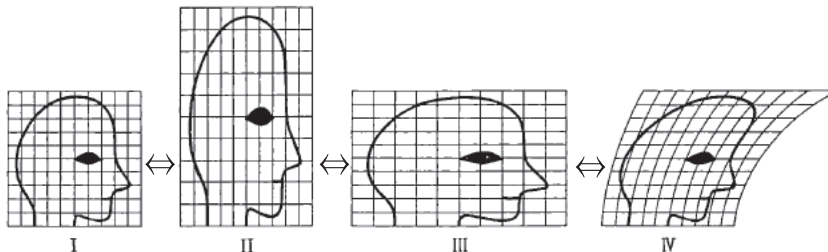
図1 多様な土偶関連資料の一端

(1) 位相幾何学 (トポロジー)
 における位相変換の例



(2) レヴィ=ストロースによる
 アルブレヒト・デューラーの方法の説明

デューラーはドイツの画家で、「人体比例論」を提示して、人の横顔の形態変異を座標変換を通して図示した。



(3) レヴィ=ストロースが説明に用いたダーシー・トムソンの図 (一部)

トムソンはスコットランドの生物学者で、動物の形態変異を座標変換を通して解き明かし、図示した。

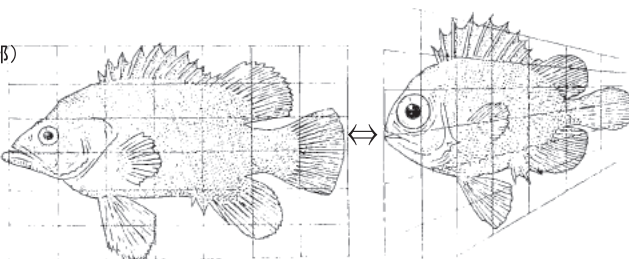


図2 レヴィ=ストロースの変換に関する説明例

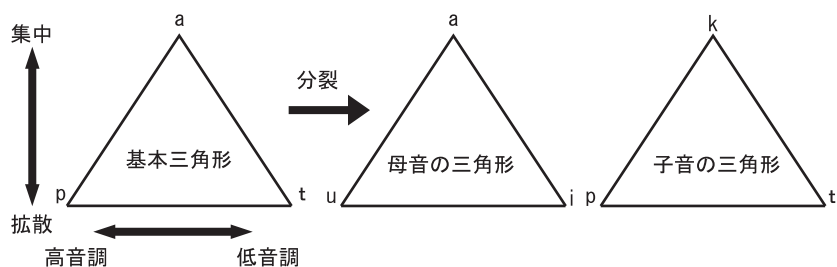


図3 ヤーコブソンの音素の三角形とその分裂 (変換)

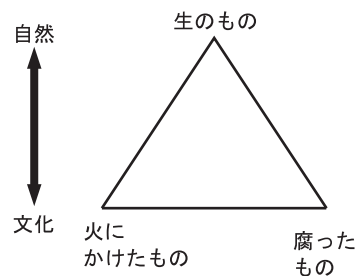


図4 レヴィ=ストロースの料理の三角形

いる（レヴィ＝ストロース 1979（大橋訳 1979））。

そこで本稿では、上記二書を主要なテキストとし、その他の書籍を補完的に用いながら、構造主義的アプローチについて整理してみたい。二書の参照に際しては、一字一句を正確に書き写すというよりは、要点を抜き書きする形を採ることとする。以下、氏の声に耳を傾けてみたい。

B. 『神話と意味』における語り 『神話と意味』において、レヴィ＝ストロースは次のように語っている（各段落末のページ番号はみすず書房刊の第8刷での掲載頁）。

01 構造主義的アプローチとは、不変なものの探求＝外見上の相違の中にある不変の要素を求めていくことであり、複雑な対象の中から何が共通するものなのかを見出していくことである（P10・11）。

02 科学の方法には、還元主義的方法と構造主義的方法の2つがある。還元主義的方法とは、例えば物理的あるいは化学的過程に分解して還元するように、複雑な現象をより根源的なものに還元する方法である。しかし、人文科学には複雑すぎるために還元できない問題が多々ある。構造主義的アプローチとは、このような難問に対して唯一採り得る方法だ。その作業とは、複雑で混沌とした現象のあいだの関係・繋がりに注目し、その現象がどんな特有の纏まりを作り出しているのかを理解しようとするものである（P12）。

03 親族構造と婚姻関係の研究に際しては、全く無意味に見える婚姻規則が世界中にたくさんあって難儀した。更に苛立たしいことに、もし無意味な規則なら民族それぞれで異なったものになってよいはずなのに、いくつあるかは別として、規則の数は有限だということだ。もし不条理が繰り返し見出され、ほかの種類の不条理もまた繰り返し現れるのであれば、それは全く不条理とは言い切れない何ものであるはずであり、さもないと繰り返し現れるはずはない。これに気づいたことが、無秩序で多様な外観をもつものたちの背後に秩序を見出そうとする私の研究方針を決定することになった（P14）。

04 神話における物語もまた、気まぐれで無意味で不条理に見える。外見上はそう見えるにもかかわらず、神話における物語は、世界的に反復して現れる。ある地域の人が頭の中で生み出した奇想天外な作り話ならば、1つしかないはずだが、遠く離れたまったく別の場所で類似した作り話が繰り返し見出されるのはおかしい。私のアプローチのポイントは、外見上に現れる無秩序の背後に、ある種の秩序があるのではないかと探ってみるところにあった（P15）。

C. 『構造・神話・労働』における語り 『構造・神話・労働』において、レヴィ＝ストロースは次のように語っている（各段落末のページ番号はみすず書房刊の第3刷での掲載頁）。

05 構造とは、要素と要素間の関係からなる全体であって、この関係は、一連の変形（変換）の過程を通じて不変の特性を保持する（P37）。

06 変形（変換）が可能かどうかで、体系と呼ばれるものと構造との違いがより鮮明になる。体系もやはり、要素と要素間の関係とからなる全体と定義できるが、変形（変換）できない。体系を変形（変換）させようとすると均衡が破れて崩壊してしまう。一方、構造とは変形（変換）するものであり、均衡状態に何らかの変化が加わった場合、別の状態へ変形（変換）する特性をもつ（P38）。

07 分かりやすい例として、16世紀ドイツの画家デューラー（1471-1528年）の絵がある（図2-(3)）。これは、方眼上に描いた人間の横顔とそのバリエーション（変異体）で、構造の実態をよく示す例だ。方眼の比率を変えたり、一部を伸縮させたり、方眼の直線を曲線に替えていくと、横顔の外見は大きく変形し、多様なバリエーションが生み出される。しかし、それでも目・鼻の関係性や口と目の関係性は変わらない。比率や伸縮、歪みを改めて元に戻すと横顔の外見も元に戻すことができる。構造とは、変形（変換）の過程を通じて、まさに不変の特性を保持するものであり、それをこの例に見て取れる（P40・41）。

08 不変とは、他の一切が変化するとき、なおも変化せずにあるものを指す。構造主義的アプローチとは、繰り返し現れるこの不変のものを探求することである（P38）。

D. 補足（1） トポロジーからの影響 以上のように、『構造・神話・労働』では構造が持つ空間的な性質がより強調される形で語られている。レヴィ＝ストロースの構造主義的アプローチは、よく知られているように（そして後述するように）構造言語学を起点にしているが、トポロジー（位相幾何学）もまた重要な理論的な基盤になっている（橋爪 1988、小田 2000、中沢 2016）。

私たちは通常、円や三角形、四角形に対し、外見が異なるものとして捉えているが、トポロジーでは円と三角形、四角形は同じ特質を持つものだと考える。例えばゴムのように伸び縮みする素材の上に円を描いたとする。3点を引っ張って変形（変換）させると外見上は三角形になり、4点を引っ張って変形（変換）させると四角形になるが、その変形（変換）を取りやめればいずれも元の円になる。変形（変換）の過程において、外見上は多様な外観を見せることになるが、要素間の関係性は不変の特性を保持している（図2-(1)）。レヴィ＝ストロースは、画家デューラーの絵に加え、生物学者トムソン（1860-1948年）が描いた図も用いて説明を重ねているが、これもトポロジーに基づいたものである（図2-(2)）。

E. 補足（2） 構造言語学からの影響 レヴィ＝ストロースの考え方にはもう一つの源がある。ロシアのロマン・ヤコブソンが展開した構造言語学である。以下、小田亮の簡潔明瞭な解説をもとに整理したい（小田 2000）。

あらゆるコミュニケーションには発信者と受信者がいて、共通のコード（符号）を使ってメッセージを伝達する。そのコードは弁別のシステムでできている。言語における弁

別の体系は、連続的かつ豊饒な可聴音の中から、ごくわずかな音だけを有用な言語音として取り出し、それらの言語音を「相関・対立」させることで成り立っている。この言語音の選択と組み合わせによって、音素—人間の使う言語の最小単位—がつくられている。

実際の音素体系は、多数の音素間の複雑で多様な相互対立で成り立っているが、ヤーコブソンはこれを二項対立とその組み合わせを用いてパターン化し、基本形態を抽出・表現することに成功した。

ヤーコブソンがそこで見出した二項対立の1つは、集中／拡散——音の周波数の狭い範囲に出力エネルギーが集中しているか／拡散しているかであり、いま1つは低音調／高音調——山が周波数の低いところにあるか／高いところにあるかである。この2つの二項対立の組み合わせによって作られるパターンを通して、多様な音素の体系のあり方を抽出し、表現しようとしたのである。

結果、最も原初的なものとして、言語の違いを超えて幼児が最初に発声する a・p・t からなる「基本三角形」があること、そこから2つの三角形に「分裂」することを提示した(図3)。その1つは a・u・i からなる「母音の三角形」である。これは、子音の低調音／高調音の対立を母音パターンに「拡張した」ものだ。いま1つは k・p・t からなる「子音の三角形」である。これは、母音の集中／拡散の対立を子音パターンで「なぞった」ものだ。

以上のようなことを、戦時下のニューヨークでレヴィ=ストロースはヤーコブソンから学び取った。レヴィ=ストロースが、そこから自身の構造主義的アプローチへ生かした主要なポイントは次の2つだろう。

第1点は、相関と対立に注目し、二項対立の組み合わせによるパターンを用いて、複雑で多様なあり方を簡潔明瞭に切り取ることである。

第2点は、変形（変換）の概念に関する応用可能性である。ヤーコブソンは「基本三角形」と「母音の三角形」・「子音の三角形」の関係を発生論的に「分裂」と表現したが、これは「不変の特性・本質」を共有しながら「拡張した」り、「なぞった」りしながら姿を変えているという点で、変形（変換）そのものである。ヤーコブソンとのやり取りの中で、レヴィ=ストロースは、変形（変換）しながら形を変えていくという構造の概念が、幾何学の世界だけでなく、人間の思考・行動に対する分析でも応用可能であることに行き着いたと見られる。

レヴィ=ストロースは以上の2点を取り込みながらアプローチの形を整えた。後年展開した神話論では、まさにヤーコブソンの三角形をモデルとした「料理の三角形」を用いながら、鮮やかな分析を進めている(図4)。

F. 小結 以上をまとめたい。『神話と意味』における構造とは、〈一見多様で混沌とした複雑な事象の背後に見出せる関係・秩序・規則・意味のことであり、無秩序でま

とまりがない混沌の中に繰り返し現れるもの〉だと整理できるだろう。そして、構造主義的アプローチとは、その〈繰り返し現れるものを通して、混沌として複雑な事象の中から関係や秩序、規則や意味を見出していく行為〉である。

『構造・神話・労働』における構造とは、〈一連の変形（変換）の過程を通じて不変の特性を保持するもの〉であり、構造主義的アプローチとは、〈その繰り返し現れるものを通して、外見上は相違するものの中から不変の特性・本質を見出していく行為〉だということになる。

すなわち構造とは〈一連の変形（変換）の過程の中で生まれた一見多様で混沌とした複雑な事象の背後に見出せる関係・秩序・規則・意味のことであり、無秩序でまとまりがない混沌の中にあって繰り返し現れる不変の特性を保持するもの〉を指す。そして、構造主義的アプローチとは、〈外見上は相違するものが林立する混沌として複雑な事象の中から、繰り返し現れるものを通して不変の特性・本質を見出し、関係や秩序、規則や意味を探し当てていく行為〉だと定義できるだろう。

4. ケーススタディとしての初期土偶の意味論

(1) 本稿でのスタンス

レヴィ=ストロースによる構造主義的アプローチとは以上のように整理できる。では、土偶の意味論にはどのような応用がありえるだろうか。

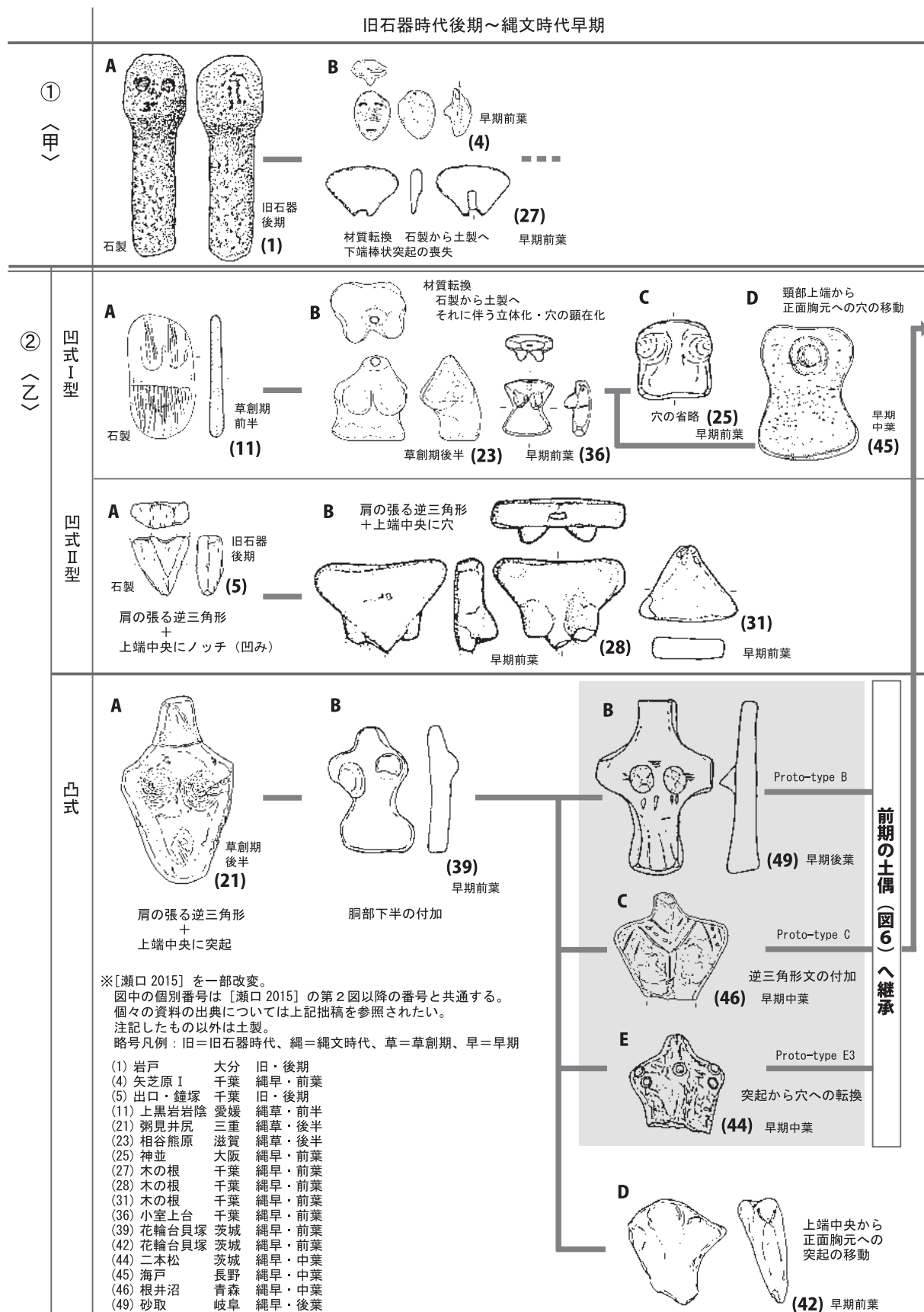
レヴィ=ストロースが重視していたものは、多様かつ複雑で混沌とした現象を生み出す〈x：一連の変形の過程〉とその中に見出せる〈y：繰り返し現れるもの〉である。外形上の差異が生み出す多様で複雑な現象に惑わされることなく〈y〉の抽出に注力し、根本的な要素としてそれを取り出すことがポイントとなるだろう。

本章では、いわゆる初期土偶関連資料を対象とし、上記のポイントを重視した取り組みをケーススタディとして試みるが、2つの段階をもって作業したい。

第1の作業は、レヴィ=ストロースがトポロジーをモチーフにしていたように、モノが持つ空間的（造形的）性質に対してアプローチする作業である。具体的には、初期土偶関連資料における類型と「型式の歴史的序列（以下、組列とする）」を設定することで〈x：一連の変形の過程〉のベースをまず整理する。そこで見出せる共通要素を〈y：繰り返し現れるもの〉として抽出し、複雑な様相を呈する混沌の中から初期土偶がもつ本質的意味を捉えてみたい。

第2の作業は、レヴィ=ストロースがヤーコブソンとのやり取りの中で着想を得た認識と手段—要素の関係性に重点を置いたアプローチ—である。第1の作業を踏まえながら、有効な二項対立の組み合わせを設け、土偶の意味に関する認識を更新・深化させるための端緒を見出してみたい。

なお、初期土偶関連資料とは、日本列島における後期旧石器～縄文前期の土偶ならびにそれに類する石製品を指す。



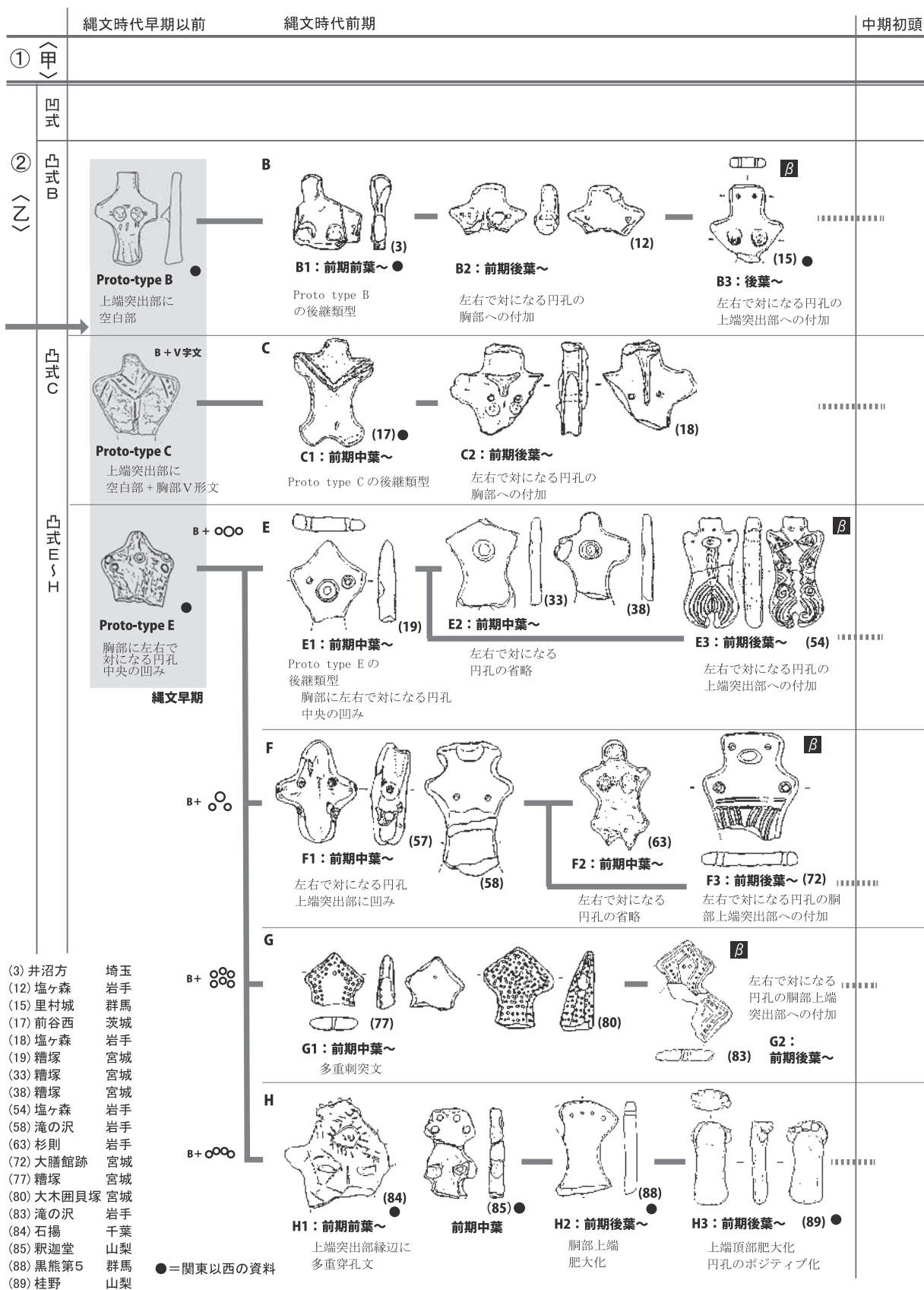


図6 初期土偶関連資料の類型と組列 (2) 初期土偶後半期 (瀬口 2018 改変)

これらは、この地域における土偶の原型であり、その検討は土偶の「そもそものあり方」を知ることにつながる。

ただ、ここで詳細な分析を展開することは紙数の都合から難しいので、それは拙稿（瀬口 2015・2018・2020）を参照いただくこととし、以下、第1と第2の作業を試みたい。

（2）試論としての2つの検討作業

A. 第1の作業 試論として2つの作業を進めるために図5～10を作成した。これらは初期土偶関連資料等に関するこれまでの筆者の検討成果をもとにまとめ直したものである（瀬口 2015・2018・2020）。

図5・6は、初期土偶関連資料の類型と組列である。このうち、図5は前半期（縄文時代早期末まで）に関するもの、図6は後半期（縄文時代前期）に関するものである。これらをベースにしてまず第1の作業を進めたい。

両図が示すように、初期土偶関連資料には、頭部を表現した〈甲〉と、胴部を表現した〈乙〉の大別二類型がある。

図5の①は〈甲〉の細分類型と組列を示したものである。細分類型として、A胴部の表現が曖昧なもの、B胴部が完全に欠落しているものがある。最も古い事例は(1)で、後期旧石器時代に位置付けられる。(4)・(27)は縄文時代早期前葉に比定されており、AからBへの変化が想定される。

図5の②ならびに図6は〈乙〉の細分類型と組列を示したものである。前半期の細分類型としては、凹式Ⅰ型A～D、凹式Ⅱ型A・B、凸式A～Eがある。最古級のものとして後期旧石器時代の(5)や縄文時代草創期の(11)・(23)・(21)があり、これらは〈甲〉と同様に初期土偶の黎明期から既に出現していたことがうかがえる。以降の型式変化は図に示したとおりで、初期土偶の後半期に継承される類型は凸式のB・C・Eである。BはB1～B3、CはC1・C2へ展開する。EはE1～E3へ展開するとともに、F1～F3、G1・G2、H1～H3へと派生する(図6)。

図7は、図5・6をベースとし、主要なバリエーションを用いて〈x：一連の変形の過程〉を整理したものである。そこに見出せる共通要素から、〈y：繰り返し現れるもの〉を抽出してみたい。

図7-(1)には〈甲〉における2形態を示した。共通要素は、頭部の下にあるはずの胴部が明確に表現されていない点であり、これを〈甲〉における〈y：繰り返し現れるもの〉だとしておく。

図7-(2)には〈乙〉における主要類型を示した。バリエーションの間で通底する共通要素は、胴部の上に用意されるはずの頭部・顔面の表現が明確でない点である。その代わりにa：小穴(②・④・⑦・⑧・⑨)やb：凹み(③)、c：空白(⑤・⑥・⑩)が用意されている。このa～cに通底する共通点とは、いずれも〈うつろ〉な空間を意味する表現だという点である。つまり、〈乙〉における〈y：繰り返し現れるもの〉とは、胴部中央に用意された〈うつろ〉

な空間であり、このことから窺える〈乙〉の本質とは、〈うつろな空間をその身に用意するもの〉だということになる。

B. 第2の作業 以上を踏まえながら、〈甲〉と〈乙〉の関係とそれらが生み出す様態を整理し、第2の作業へ進みたい。結果は以下になるだろう。

〈甲〉と〈乙〉は、それぞれが相互に補完する関係にある。〈乙〉の胴部中央には、本来用意されるはずの頭部・顔面の代わりに〈うつろ〉な空間が必ず用意されており、この〈うつろ〉な空間を〈甲〉が満たすことで、はじめて一体の完成形が現れる関係が作りだされているのである。そういった意味で、〈甲〉と〈乙〉は〈満たすもの〉と〈満たされるべきもの〉の関係にあり、相関しながらも対立する二項の関係にある。

ただ、初期土偶の実際において、〈甲・乙〉が一体化した状態で具現されることは基本的にない。その一体化した様態をβ態とするならば(図8-(2))、実際に具現化されていた様態は、〈甲〉と〈乙〉を分割・分離し、別個に表現したα態である(図8-(1))。β態＝〈乙〉が〈甲〉に〈満たされたもの〉であるのに対し、α態＝〈乙〉が〈甲〉にまだ〈満たされていないもの〉である。そういった意味で、α態とβ態の関係もまた、相関しながらも対立する二項の関係にある。

図9は、〈甲〉と〈乙〉の関係を二項対立①とし、またα態とβ態の関係を二項対立②として、その組み合わせを三角形で示したものである。実際には具現化されることのなかったβ態と対比するなら、実際に具現化されていたα態の〈乙〉とは、〈満たされるべきだが、まだ満たされていないもの〉であり、〈甲〉とは〈それを満たすもの〉だということが明白になるだろう。

肝心なことは、〈甲〉と〈乙〉のそれぞれが敢えて二項対立する形で造形されていることだ。この点を踏まえるなら、〈乙〉とはすなわち〈依代的なもの〉であり、〈甲〉とはそれに〈取りつくもの〉だということになる。

ともあれ、この図9に示したあり方こそが、初期土偶に見出せる土偶の基本構造であり、2つの様態と2つの大別類型に与えられていた本質的意味を可視化したものである。

なお図10は、中期土偶に関して触れた拙稿（瀬口 2013・2020）と後期土偶に関して触れた拙稿（瀬口 2019）をもとに、それぞれの時期における2つの二項対立とその組み合わせによる三角形を例示したものである(2)。

中期以降、土偶の形態は更に多様化し、より複雑で混沌とした様相を示すようになる。また、ほぼそれまで表現されることのなかったβ態が具現化され、α態より何倍も数多く見られるように変化した。見た目において明確な差があることを踏まえるなら、初期土偶と中期以降の土偶の間には大きな乖離があるようにも見える。

その一方で、図9と図10-(1)・(2)の関係が示すように、初期土偶に見出せる土偶の基本構造は、おそらく中期と後

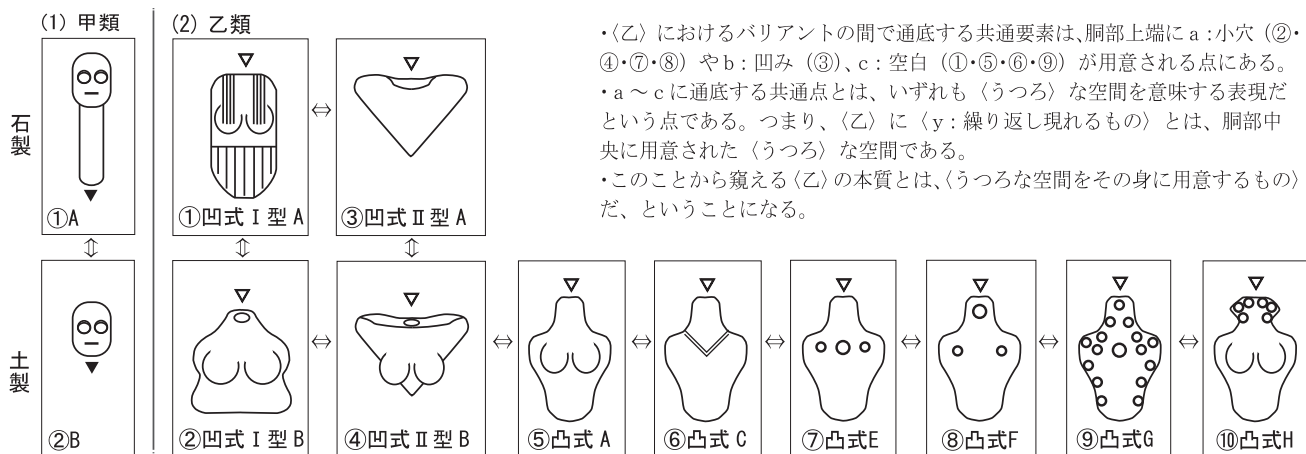


図7 初期土偶関係資料における〈x：一連の変換の過程〉と〈y：繰り返し現れるもの〉

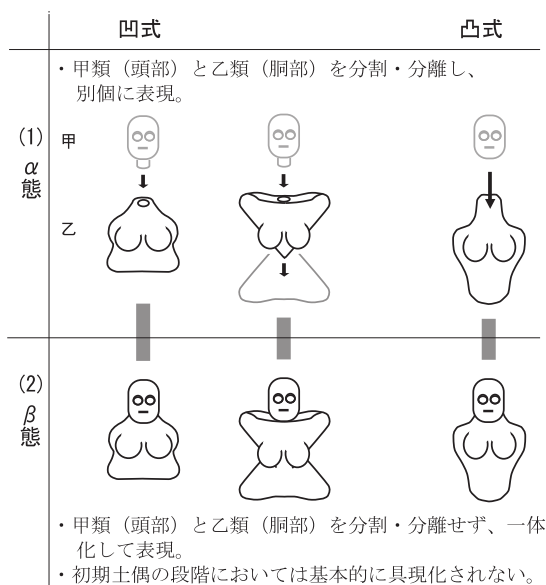


図8 初期土偶関連資料の様態

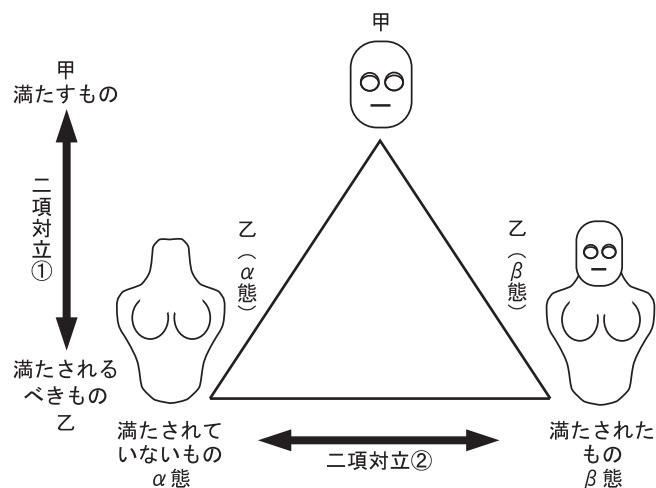


図9 初期土偶関連資料における2つの二項対立と三角形

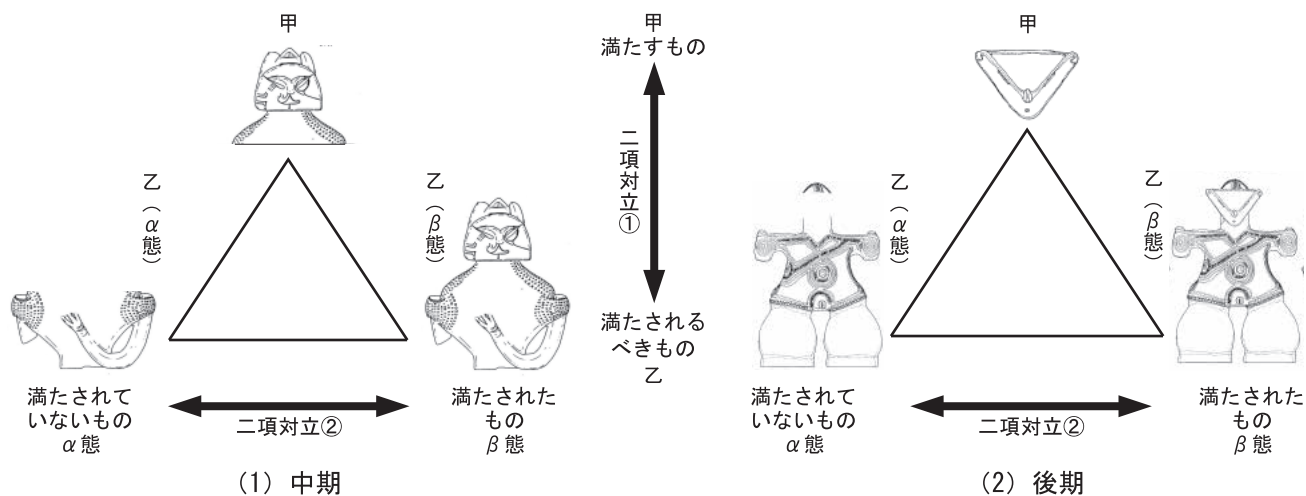


図10 中期と後期の土偶における2つの二項対立と三角形の例

期においても繰り返し見出すことができる。本稿で見出せた一連の三角形が示すものは、まさに〈変形（変換）の過程の中で生まれた一見多様で混沌とした複雑な事象の背後に見出せる関係・秩序・規則・意味であり、無秩序でまとまりがない混沌の中にあって繰り返し現れる不変の特性を保持するもの〉だと筆者は考える。

5. おわりに

本稿では、土偶の意味に関する研究における問題点を提示し、それを攻略するための端緒を模索するため、レヴィ＝ストロースの構造主義的アプローチを参照し、それを踏まえた上で簡単な検討を試みてみた。結果は以上のとおりだが、認識の更新と深化の端緒は確かにあるように思う。紙数の都合から詳細は描き切れていないが、検討を重ねて展開を図りたい。諸賢からの批判と指導を乞う。

註

- (1) 白井光太郎が「貝塚より出し土偶の考」(白井 1886)を公表し、土偶の用途を初めて論述した。白井は、玩弄物、神像、携帯される装飾品などを候補として提示している。
- (2) 本図は、いずれも一体化した姿として表現されたβ態の土偶を〈甲〉と〈乙〉に分割し、三角形の中に落とし込んである。本来はその論理的妥当性をここに示したいが、紙数が足りない。それぞれの拙稿を参照されたい。

文献（著者名・刊行機関名 50 音順、刊行年順）

- 大野雲外(1910)「土偶の形式分類に就て」『東京人類学会雑誌』第 26 巻第 296 号 東京人類学会
- 小田 亮 (2000) レヴィ＝ストロース入門 ちくま新書 265
- 小野美代子(1984)『土偶の知識』考古学シリーズ 18 東京美術
- 橿形町教育委員会(1994)『鋳物師屋遺跡』
- 橿原功一(1997)「土偶装飾付土器について」『土偶研究の地平』4
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター(1994)『西ノ前遺跡』
- 佐原真・小林達雄(2001)『世界史のなかの縄文一対論』新書館
- 白井光太郎(1886)「貝塚より出し土偶の考」『人類学会報告』第 2 号人類学会
- 鈴木正博(1989)「安行式土偶研究の基礎」『古代』第 87 号 早稲田大学考古学会
- 瀬口眞司(2011)「土偶の機能・用途に関する理解の移ろい」『紀要』24 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司(2013)「土偶とは何か―図像に残された意図から用途と役割を探る」『紀要』26 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司(2015)「初期土偶の根本的性質と展開過程」『古代文化』67-、公益財団法人古代学協会
- 瀬口眞司(2018)「前期土偶の根本的性質と展開過程」『紀要』31 財団法人滋賀県文化財保護協会

- 瀬口眞司(2019)「土偶とは何か」『考古学講義』ちくま新書
- 瀬口眞司(2020)「土偶装飾付土器の根本的性質と展開過程」『紀要』33 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 高柳圭一(1987)「東北地方に於ける縄文時代後期後半の土偶」『遼航第 5 号』早稲田大学大学院文学研究科考古談話会
- 谷川磐雄(1926)「土偶に関する二・三の考察」『國學院雑誌』第 32 巻第 5 号(『大場磐雄著作集』第一巻 雄山閣)
- 茅野市教育委員会(2003)『中ッ原遺跡』
- 坪井正五郎(1895)「コロボックル風俗考」『風俗画報』第 104 号(『日本考古学選集』2 築地書館)
- 鳥居龍藏(1922)「日本石器時代民衆の女神信仰」『人類学雑誌』第 37 巻第 11 号
- 中沢新一(2016)『野生の思考』(100 分 de 名著) NHK 出版
- 橋爪大三郎 (1988)『はじめての構造主義』講談社現代新書
- 藤森栄一ほか(1965)『井戸尻』中央公論美術出版
- 松室孝樹(2013)「発生期土偶に関する覚書」『紀要』26 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 山田 猛(1999)「各部身体表現から見た土偶の性格」『研究紀要』第 8 号 三重県埋蔵文化財センター
- 八幡一郎(1939)「日本先史人の信仰の問題」『人類学・先史学講座』第 13 巻 雄山閣
- 八幡一郎(1959)「日本の先史土偶」『MUSEUM』第 99 号 東京国立博物館／美術出版社
- レヴィ＝ストロース(1978 大橋保夫訳 1996)『神話と意味』みすず書房
- レヴィ＝ストロース(1979 大橋保夫訳 1979)『構造・神話・労働』みすず書房

挿図典拠

- 図 1 橿形町教育委員会 1994、橿原 1997、茅野市教育委員会 2003、藤森ほか 1965、瀬口 2015・2018、財団法人山形県埋蔵文化財センター1994 から引用・筆者編集
- 図 2 (1) 橋爪 1988 より転載、(2) 中沢 2016 より転載、(3) レヴィ＝ストロース(1979 大橋保夫訳 1979) より転載
- 図 3 小田 2000 を参考に筆者作成
- 図 4 中沢 2016 を参考に筆者作成
- 図 5 瀬口 2015 より転載 (一部改変)
- 図 6 瀬口 2018 より転載 (一部改変)
- 図 7～9 筆者作成
- 図 10 橿原 1997、茅野市教育委員会 2003 をもとに筆者作成

(せぐち しんじ：総務課 企画室長)

湖北・湖東地域の前期古墳の葺石

宮 村 誠 二

1. はじめに

葺石は、埴輪と並ぶ代表的な古墳の外装施設である。その存在は古くから認識されており、すでに 100 年を超える研究史がある。近年、葺石をめぐるのは、埴丘の断ち割り調査の成果を用いた構造分析にもとづく施工技術系譜に関する研究が飛躍的な進展を見せており、その成立過程や変遷、地域性などが盛んに議論されている(1)。

こうした動向は、20 世紀末葉から 21 世紀初頭にかけて相次いで行われた奈良盆地東南部を中心とした地域の前期古墳の調査の進展に伴い、初期の葺石の姿が明らかになってきたことによるもので、すでに近畿中央部の事例を中心に葺石の様相が整理され、大方の変遷観が示されている(高橋 2002、青木 2003、廣瀬 2003・2008・2011)。

最近では、近畿中央部での動態が一応把握されたことをうけて、九州や中国、四国、東海、関東でも葺石の導入と展開が議論されている(高橋 1999・2002、山田 2004、塩治 2008、秋元 2013、石村 2019)。

しかし、その一方で、研究がほとんど行われていない地域もある。たとえば、近畿中央部と東日本とのあいだに位置する滋賀県の事例は、東日本への葺石の広がりを考える上でも重要な位置を占めるものと思われるが、今日までまとまった研究はみられない。

そこで本稿では、滋賀県の前期古墳の葺石をとりあげ、特徴と変遷を明らかにする。そして、当該地域での葺石の導入とその背景について考えてみたい。

とはいえ、滋賀県内には葺石を採用する前期古墳がさほど多くなく、また、類例のなかには 60 年以上も前に調査され、今日的な研究水準での検討が困難な事例も少なくない。それゆえ、本稿では比較的最近の調査事例が多い湖北・湖東地域の前期古墳の葺石を検討対象とする。

2. 葺石の様相

湖北・湖東地域において葺石の存在が確認されている前期古墳は 8 基である(図 1)。以下、発掘調査報告書等の記載事項にもとづき、各古墳の葺石の様相を概観する。

深谷古墳（前方後円墳・35.5m）

古墳は前方部を西に向けて築かれている。埴丘は 2 段築成である。葺石は後円部東側面、南側くびれ部、前方部西側面で検出されている。

前方部西側面の葺石は、埴裾で 25 cm 以内の小振りな石材が使用され、埴頂部近くでは 35 cm 程度の大振りな石材が用いられている。埴丘斜面の傾斜角度は約 20 度である。

南側くびれ部では、前方部でおおむね 20 cm 以内の石材

が用いられていたのに対し、後円部では、基底石に 25 cm 以上の石材を用い、その上方に 10～15 cm の石材が多用されていた。埴丘斜面の傾斜角度は約 20 度である。

なお、南側くびれ部では、地山の岩盤を整形して埴丘表面としているとみられる箇所がかなり認められた。

後円部東側面の葺石は、埴裾の基底石のみ残存しており、40 cm 前後の石材が用いられている。埴丘斜面の傾斜角度は 30 度前後である(高月町教委 2001)。

西野山古墳（前方後円墳・90m）

分布調査で、葺石とみられる人頭大の石材が確認されているが、詳細は不明である(高月町教委 2001)。

木戸越古墳（前方後円墳・37.2m）

古墳は前方部を北西に向けて築かれている。埴丘は 2 段築成である。葺石は前方部、くびれ部、後円部で確認されている。葺石材は円磨度の低い垂角礫や角礫が主体である。

前方部北西側面の葺石は、拳大～40 cm 程度の石材が横使いされている。埴丘斜面の傾斜角度は 30 度前後である。

東側くびれ部では、前方部の基底石とその上数段に 40 cm 前後を基本とする石材(小さいもので 20 cm 程度)を用い、上部にいくほど石材が小さくなる傾向が認められる。後円部の葺石もこれと同様の傾向にあるが、基底石の石材がやや大きく、45 cm 前後を基本とする。埴丘斜面の傾斜角度は前方部が 37～38 度、後円部が 35 度である。

後円部南側面の葺石は、1 段目斜面の基底石に 40～50 cm 前後の石材を横使いし、その上部に 20 cm 前後の石材が葺かれている。1 段目斜面の傾斜角度は 30 度前後である。2 段目斜面では、20～40 cm の石材が主体的に用いられている。2 段目斜面の傾斜角度は 30 度前後である(高月町教委 2001)。

姫塚古墳（前方後方墳・72～80m）

古墳は前方部を南に向けて築かれている。葺石は後方部東側面、後方部西側面、後方部南側面で検出されているが、前方部では確認されず、当初から施工されていなかったとみられる。葺石材は円磨度の低い垂角礫や角礫である。

後方部東側面では、葺石が高さ 1 m 前後まで残存していた。基底石に 15～25 cm のやや横長の石材を用い、基底部から 0.2～0.6 m の高さに 30～40 cm の石材が、さらにその上方には 15～20 cm の石材が用いられている。埴丘斜面の傾斜角度は約 45 度である。

後方部西側面の葺石は、基底部から約 1 m の高さまで残存していた。基底石は 20～40 cm の石材をおもに横使いするが、10 cm 前後の小振りな石を用いている部分もある。埴丘斜面の傾斜角度は約 45 度である。ここでは、基底部から

約 0.3mの高さまで急角度で積み上げ、そこから傾斜変換して約 45 度の傾斜で積まれている部分が認められる。

後方部南側面の葺石は、基底部から約 1.4mの高さまで残存していた。基底石に 20～25 cmの長方形の石材を横使いする。基底部に立ち上がりをもつ点は、後方部西側面で確認された状況と類似している。墳丘斜面の傾斜角度は約 45 度である（高月町教委 2005）。

若宮山古墳（前方後円墳・50m）

古墳は前方部を南西に向けて築かれている。墳丘測量時や分布調査の際に葺石が確認されている。具体的な様相は不明だが、用田政晴氏の観察によれば、後円部西側では地山に含まれる 5～10 cm大の小振りな石とは別にそれよりやや大きめの山石が多くみられるため、「少なくとも後円部の葺石の存在は確実である」（用田 2011、P. 36）という。

荒神山古墳（前方後円墳・124m）

古墳は前方部を北西に向けて築かれている。葺石は前方部、後円部とも確認されているが、前方部東側面に設定されたトレンチで良好な状態で検出された以外には残存状態は良好でなく、多くが崩落した状態であった。

このトレンチでは、3段築成の各段斜面で葺石が確認されている。1段目斜面では基底石に1辺 40 cmの比較的扁平な石材を用い、斜面に貼り付けるように設置されている。1段目テラスにいたる葺石は、上下端を小口積み、中位を貼石状に葺いている。1段目斜面の傾斜角度は 31 度である。2段目斜面の葺石は、基底石に1辺 40～50 cmの扁平な石材を用い、その上方には 20～30 cm程度の石材を小口積みで葺いている。2段目斜面の傾斜角度は 33 度である。3段目斜面の葺石は、基底石に長さ 40～50 cm、幅 20 cm前後の石材を横使いし、その上方 1 mあまりの範囲には長さ 20 cm程度の石材を小口積みし、さらに上方では貼石状に葺いている。3段目斜面の傾斜角度は 32 度を測る。

安土瓢箪山古墳（前方後円墳・136m）

葺石が確認されているが、具体的な様相は不明である（梅原 1938）。

雪野山古墳（前方後円墳・70m）

古墳は前方部を北東に向けて築かれている。葺石は前方部・後円部とも確認されているが、葺石の検出状況からみて、前方部東斜面には当初から葺石が施されていなかった可能性がある。

前方部の西斜面では、基底石に長軸 30～40 cmほどの石材が用いられている。

後円部では、東斜面に設定された後円部第 1 トレンチで検出された葺石が基底部付近に長軸約 30～50 cmの比較的大きな石材を用い、それより上では、20 cmほどの石材を部分的に用いながら、その間を拳大の石材で充填している。部分的に墳丘斜面に差し込むように葺かれた箇所もあり、表面にある葺石の内側には 1～2 石の裏込め石が存在した。

一方、これと隣接し、同じく東斜面に設定された後円部

第 2 トレンチの葺石は、石材を斜面に貼り付けるように葺かれている。使用石材も 10 cm角の小振りな石材を中心に、長軸 50 cmを測る大きな石材が所々に配されており不規則であるなど、葺石の葺き方や石材の大きさに違いが見られる。墳丘斜面の傾斜角度は約 30 度である。

後円部西斜面では、基底石に長軸が 50 cm近い石材を積み重ねるように用い、その上では長軸 20 cm程度の石材を挟みながら拳大の石材で充填している。墳丘斜面の傾斜角度は約 30 度である（雪野山調査団 1996）。

3. 湖北・湖東地域における葺石の特徴と変遷

ここでは、前章において概観した湖北・湖東地域の前期古墳の葺石の特徴を整理する。また、各古墳を福永伸哉氏による前期古墳の時期区分案（福永 1996）にもとづいて位置づけることで、当該地域での葺石の変遷を検討する。

(1) 特徴

湖北・湖東地域の葺石の特徴として、採用のあり方に地域間や古墳間・古墳群間で差異のあることを指摘できる。

すなわち、当該地域には、前章において概観した古墳以外にもやや古い事例だが、東近江市の神郷亀塚古墳（能登川町教委 2004）、そして、長浜市の長浜古墳群や米原市の定納古墳群（近江町教委 2005）に前期古墳が存在するが、これらには葺石が採用されていない。

また、葺石を採用する古墳には、前方後円墳が目立つが、墳丘規模に着目すると、湖東では墳丘長 70～136mの比較的大きな古墳に限られるのに対し、湖北では墳丘長 35m前後の中小規模の古墳にも葺石が採用されている。さらに、古保利古墳群中の前方後円墳では、湖東では確認できない古墳群中での継続的な採用が確認できる。

葺石自体については、全体として葺石材に円磨度の低い角礫や亜角礫が多用される傾向を指摘できるが、石材の大きさや用い方には古墳間で差異がみられる。

なお、当該地域では、先学によって初期の葺石として把握された重厚な裏込めをもつ事例（高橋 2002、青木 2003）や基底石に扁平な石材を用い、これを主に縦使いして墳丘裾に貼り付ける事例（廣瀬 2011）は確認できない。

(2) 変遷

次に葺石の変遷を検討する。福永氏による前期古墳の時期区分案は、仿製三角縁神獣鏡の登場を境に前期を 2 分し、さらにそれぞれを 2 細分するもので、前期を前Ⅰ期～前Ⅳ期の 4 期に区分する。氏は各期の実年代を、おおむね前Ⅰ期—3 世紀後葉、前Ⅱ期—4 世紀前葉、前Ⅲ期—4 世紀中葉、前Ⅳ期—4 世紀後葉と考えている（福永 1996）。

福永氏は雪野山古墳と安土瓢箪山古墳をそれぞれ前Ⅱ期と前Ⅲ期の代表例として挙げている。他の古墳については、上記 2 古墳のように埋葬施設や副葬品の様相が明らかでなく位置づけが難しいが、墳丘形態や出土埴輪の特徴などから、おおむね以下のように位置づけられるだろう。

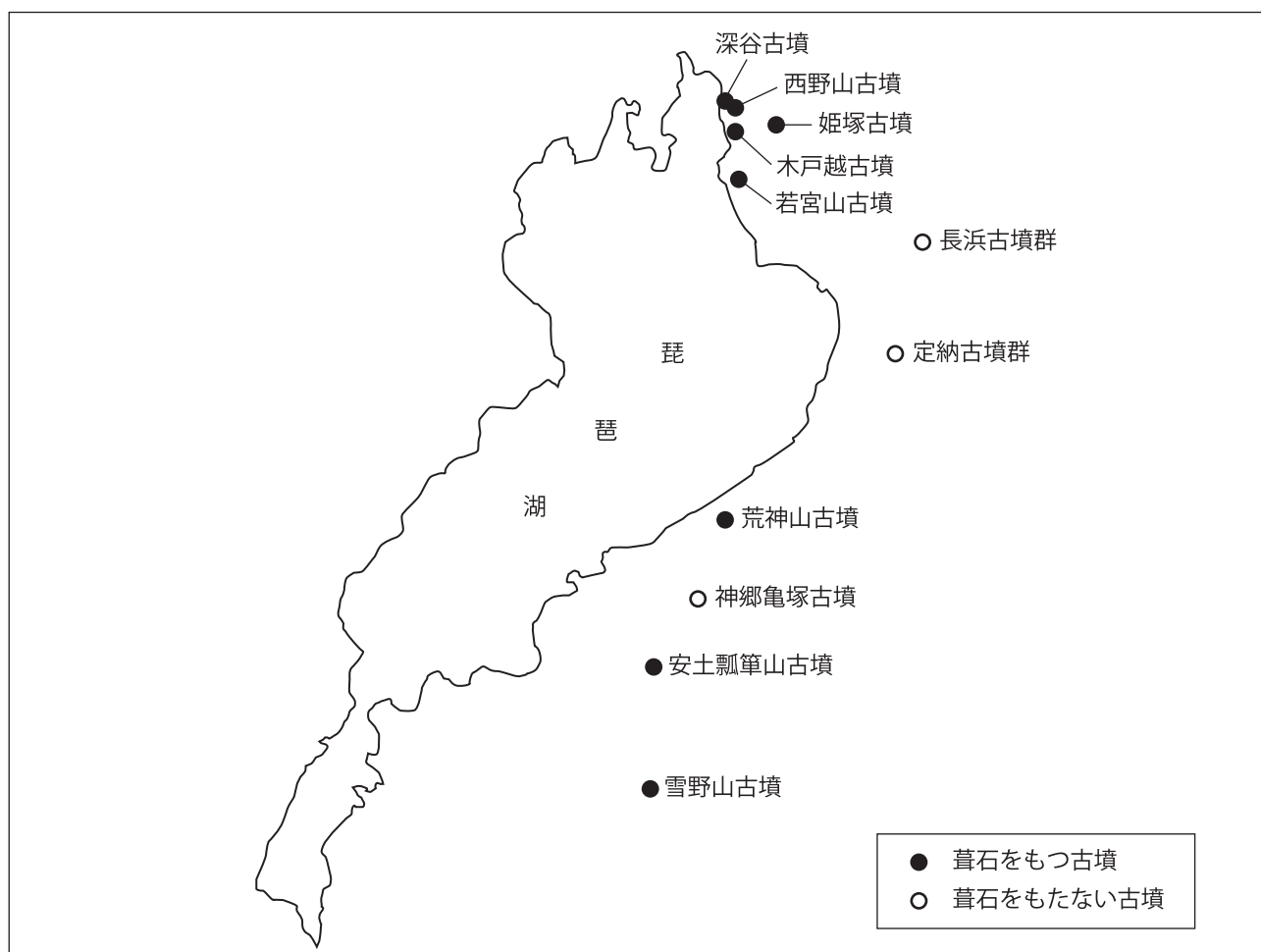


図1 湖北・湖東地域の前期古墳

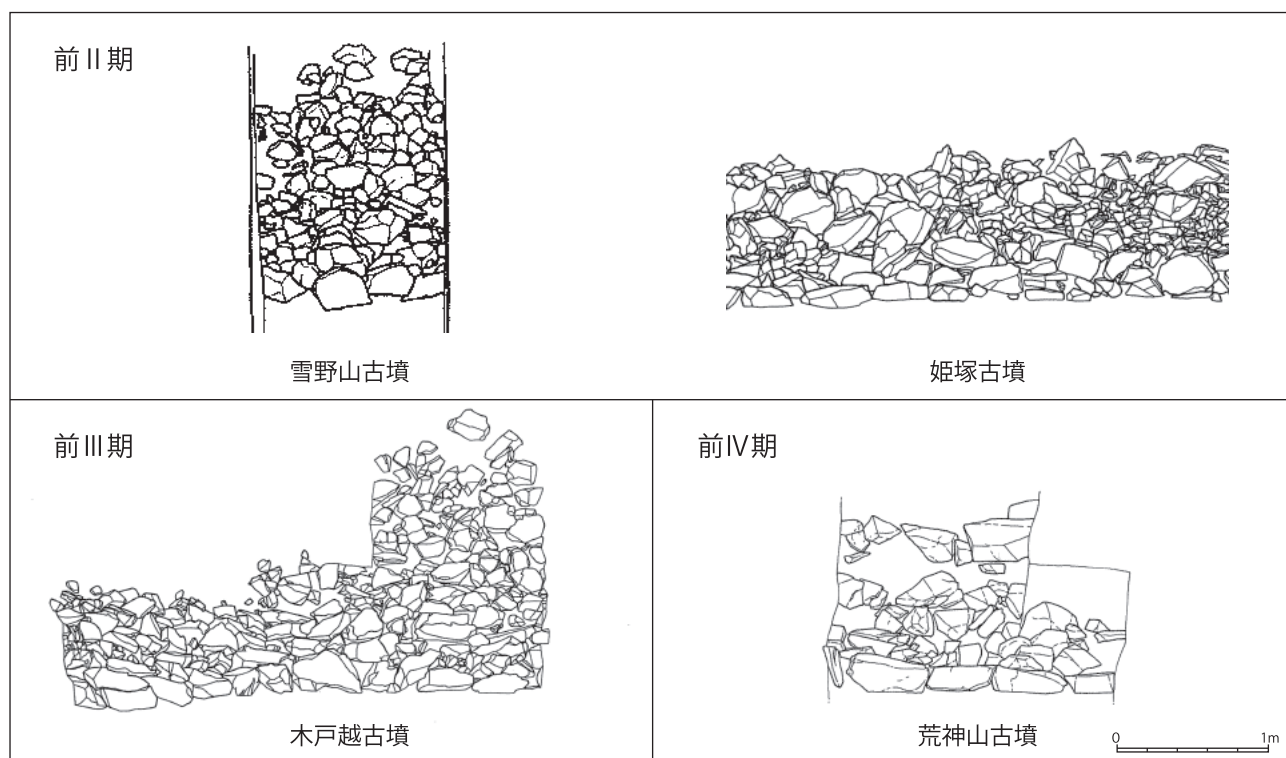


図2 湖北・湖東地域の前期古墳の葺石の変遷 (S=1:40)

前Ⅱ期 雪野山古墳 深谷古墳 姫塚古墳
前Ⅲ期 安土瓢箪山古墳 木戸越古墳
前Ⅳ期 荒神山古墳 若宮山古墳 西野山古墳

それでは、以上の年代観に準拠して当該地域における葺石の変遷を検討しよう（図2）。

まず、前Ⅱ期に位置づけた3古墳の葺石は、のちの時期のものに比べ、全体として不統一な印象を受ける。これは墳丘各所で葺石の様相に差異がみられることに加え、基底石以外にも大振りな石材が不規則に使用されるなど基底石に他よりも大振りな石材を用いる傾向が弱いためであろう。さらに、葺石材として拳大～15 cm程度の小振りな石材が多用されることも特徴として挙げられる。

また、雪野山古墳と深谷古墳では、自然の岩盤に加工を施し、墳丘表面として利用している箇所がみられる点、雪野山古墳と姫塚古墳では墳丘の一部で葺石が施されていない箇所がみられる点を共通点として指摘できる。

こうした前Ⅱ期の葺石に対し、前Ⅲ期の葺石は、木戸越古墳にみられるように基底石に他よりも大振りな石材を用いる傾向が明確となり、葺石材は前Ⅱ期のものに比べてやや大型化する。木戸越古墳では、基底石に40～50 cmの石材が横使いされ、その上部には20 cm前後の石材が用いられていた(2)。こうした特徴は、前Ⅳ期にも引き続き認められ、荒神山古墳では、基底石に他よりも大振りな石材を横使いすることがより徹底されているようだ。

以上、湖北・湖東地域の前期古墳の葺石について採用古墳の年代観にもとづき、変遷を検討した。その結果、以下の特徴が明らかになった。

まず、当該地域では、福永氏による古墳編年の前Ⅱ期、すなわち4世紀前葉に地域内でも最初期の方後円墳においていち早く葺石が導入され、間もなく前方後方墳にも葺石が導入されたとみられる。そして、その後も前期をとおりて前方後円墳を中心に葺石が採用され、基底石に他よりも大振りな石材を横使いすることが徹底されていく方向で推移したものと考えられる。

4. 葺石の導入とその背景をめぐる予察

それでは、最後に湖北・湖東地域の前期古墳の葺石を廣瀬氏の研究成果に拠って大局的見地から検討し、当該地域での葺石の導入とその背景について予察する。

廣瀬氏は、先行研究において前期古墳の葺石を以下のよう分類している（廣瀬2008・2011）。

- A類 重厚な裏込めを用いながら裾部を急角度で立ち上げたのち、一定の高さで傾斜を緩和させて上方斜面に至るもの。表面には裏込めよりも大振りの石材を主に横使いして積み上げる。
- A1類 裾部を石垣状に一定の高さまで立ち上げ、傾斜変換して上部に至る。表面に積み上げる石材は基底石とそれ以外で明確な区別がない。

A2類 裾部を2、3石程度急角度で立ち上げ、傾斜変換して上方に至る。基底石には他よりも大型の石材が用いられる。

B類 基底石に扁平な石材を用い、これを主に縦使いして墳丘裾に貼り付けるもの。顕著な裏込めを用いずに全体を積み上げる。

B1類 扁平な石材を貼り付けて基底石とし、一定の高さまで急角度で石材を積み上げたのち、傾斜変換して上方斜面に至るもの。

B2類 扁平な石材を貼り付けて基底石とするが、明確な立ち上がりをもたず、裾部から一定の角度で石材を積み上げるもの。

C類 他より大振りの石材を横使いして基底石とし、顕著な裏込めを用いずに裾部から一定の角度で上方まで石材を積み上げるもの。

湖北・湖東地域の前期古墳の葺石を廣瀬氏の分類案に照らすと、具体的な様相が判明している事例のうち、木戸越古墳と荒神山古墳の葺石はC類に該当すると思われる。

また、廣瀬氏がA1類→A2類→C類と系列的に変遷したことを指摘していることを念頭におくと、姫塚古墳で確認された基底部の立ち上がりや雪野山古墳で確認された1～2石の裏込め石は、A2類からC類への過渡的様相として理解できる。

採用古墳の年代や分布からみて、A類は奈良盆地東南部で成立した可能性が高く、大阪府の玉手山古墳群や京都府の椿井大塚山古墳、寺戸大塚古墳などでも採用されている。雪野山古墳や深谷古墳、姫塚古墳の事例は、これらA類の葺石とも関係が深いとみられる。先行する時期のA類採用古墳のあり方からみて、湖北・湖東地域における導入期の葺石の系譜は、奈良盆地東南部をはじめとする近畿中央部に迫れる可能性が高いだろう。

こうした湖北・湖東地域での葺石の導入背景を考える上で注目されるのが、導入期の葺石をもつ雪野山古墳や古保利古墳群が奈良盆地東南部の勢力が主導する政権による東海勢力牽制政策の一端を担って存在しているとする福永氏の見解である（福永1996）。当該地域の前期古墳における葺石の導入は、こうした倭王権の東方政策にかかわる王権中枢勢力と地域勢力との強い結びつきを背景に達成された可能性が考えられる(3)。少なくとも導入期においては葺石に王権中枢勢力との親疎が反映されていたとみられる。

なお、滋賀県の東に隣接する東海地方では、岐阜県象鼻山1号墳（養老町教委・富山大考古研1999）や愛知県東之宮古墳（犬山市教委2014）といった前方後方墳にいち早く葺石が導入される(4)。さらに、その後においても前期後半の大型前方後円墳である愛知県青塚古墳（犬山市教委2001）や前方後方墳の岐阜県西寺山古墳（可児市教委1999）に重厚な裏込めをもつ葺石が採用されるなど、湖北・湖東地域とは異なる動態がみられる。こうした違いが何に起因する

のか、東海地方での葺石の導入事情も含め、その解明には、より広域的な比較研究の必要性を痛感する。

残された課題は多いが、本稿がこれまであまり検討されてこなかった滋賀県の古墳の葺石を考えるための一助となれば幸いである。

註

- (1) たとえば、葺石の起源は、従来、漠然と中・四国地方の弥生墳丘墓に求められてきたが(近藤 1986)、それを批判し、東四国地域の積石塚に求める意見(高橋 1999・2002)に加え、近年は列島外、具体的には中国東北地方から朝鮮半島北西部に求める意見(廣瀬 2008・2011)も主張されるなど、これまで以上にグローバルな視点に立った議論が要求される情勢にある。
- (2) なお、深谷古墳・姫塚古墳・木戸越古墳の葺石については、黒坂秀樹氏の言及がある(黒坂 2005)。黒坂氏は、深谷古墳を3世紀後葉、木戸越古墳を4世紀前葉の築造とし、深谷古墳の葺石と姫塚古墳の葺石が細部に違いはあれ、葺き方が類似すると観ている。そのうえで「精美さというか完成度は木戸越古墳が高く、次いで姫塚古墳と観ている」(黒坂 2005、P. 72)。黒坂氏は姫塚古墳の築造を4世紀前半のなかでとらえているが、この言及からは、氏の深谷古墳→姫塚古墳→木戸越古墳という変遷観が窺える。
- (3) なお、雪野山古墳については、都出比呂志氏が堅穴式石室や木棺型式が奈良県天理市の天神山古墳のそれと類似することを指摘し、こうした類似が奈良盆地東南部と近江とのこの時期における交流関係を示唆するものとして重要であることを指摘している(都出 1996)。
- (4) ただし、象鼻山1号墳の葺石は、施工後に表面が盛土によって被覆される特異なものである。

挿図典拠

- 図1 宮村作成
図2 各古墳の発掘調査報告書掲載図を加工して宮村作成

引用・参考文献

- 青木 敬(2003)「葺石構築法とその変化」『古墳築造の研究―墳丘からみた古墳の地域性―』 六一書房
秋元陽光(2013)「東国における葺石の受容」『駒澤考古』第38号 駒澤大学考古学研究室
石村友規(2019)「九州島における導入期の葺石に関する一考察」『学術財研究』第1集 『学術財研究』編集事務局
黒坂秀樹(2005)「総括」『高月の主要古墳Ⅰ』高月町教育委員会
近藤義郎(1986)「前方後円墳の誕生」『岩波講座日本考古学6 変化と画期』岩波書店
塩治琢磨(2008)「葺石から見た古墳の一樣相」『真朱』第8号
高橋克壽(1999)「西寺山古墳の葺石」『前波の三ツ塚』可児市教育委員会
高橋克壽(2002)「古墳の葺石」『文化財論叢Ⅲ 奈良文化財研究

- 所創立50周年記念論文集 奈良文化財研究所学報第65冊』奈良文化財研究所
都出比呂志(1996)「雪野山古墳の石室の特徴と構築過程の復元」『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団
広瀬和雄(1992)「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社
廣瀬 覚(2003)「葺石」『立命館大学文学部学芸員過程研究報告 第10冊 五塚原古墳第1・2次発掘調査概報』立命館大学文学部学芸員過程 真陽社
廣瀬 覚(2008)「葺石の成立・展開と地域間交流」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
廣瀬 覚(2011)「葺石と段築成」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
福永伸哉(1996)「雪野山古墳と近江の前期古墳」『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団
山田俊輔(2004)「前期古墳の葺石」『川東車塚古墳の研究』吉備人出版
用田政晴(2011)「前期小形前方後円墳の史的位置」『琵琶湖と地域文化―林博通先生退任記念論集―』サンライズ出版

古墳文献

- 犬山市教育委員会(2001)『史跡青塚古墳発掘調査報告書』
犬山市教育委員会(2014)『史跡東之宮古墳』
梅原末治(1938)「安土瓢箪山古墳」『滋賀県史跡調査報告』第7冊 滋賀県
近江町教育委員会(2005)『定納古墳群』
可児市教育委員会(1999)『前波の三ツ塚』
高月町教育委員会(2001)『古保利古墳群 第1次確認調査報告書』
高月町教育委員会(2005)『高月の主要古墳Ⅰ』
能登川町教育委員会(2004)『神郷亀塚古墳』
彦根市教育委員会(2010)『荒神山古墳』
雪野山古墳発掘調査団(1996)『雪野山古墳の研究』
養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室(1999)『象鼻山1号古墳―第3次発掘調査の成果―』

(みやむら せいじ：調査課 主任技師)

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.34 2021.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages